

大空間を支える強さ 28mm剛床工法

一般的に24mmで使用されている構造用合板に対してケントホームズでは28mmの構造用合板を直接梁に留め、柱・梁と床面を一体化させる「剛床工法」を採用しています。

「剛床工法」は水平剛性を高め、点ではなく“面”で衝撃を受け止めます。

地震や台風時に受ける床面の“横揺れ”や“ねじれ”を抑える効果があります。

また、上棟時に2階の床面となる構造用合板を敷き詰め、足場を確保してから上階の柱を建てていくため、作業時の安全性と作業性が高められます。

■剛床工法

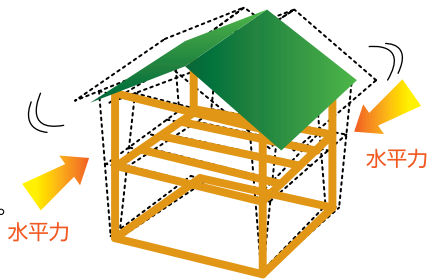


水平面の強度が不足すると、地震などで大きな力が加わると、建物も捻じれ、倒壊してしまいます。耐震住宅を作るためには、水平剛性(横からの力、ひねりに対抗する力)を確保することが欠かせません。

横揺れ、ねじれに強い剛床工法

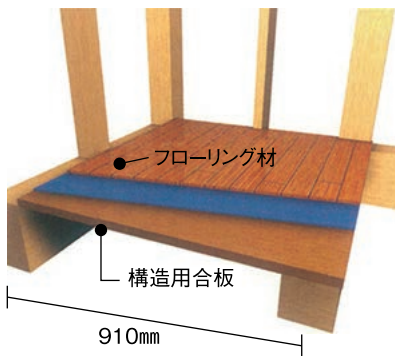
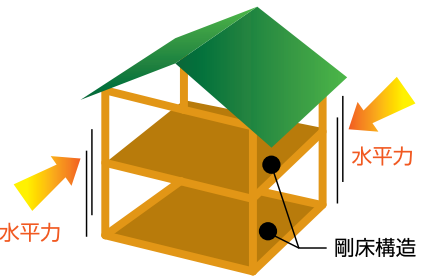
剛床なし

床の耐性が低いと、地震などの力の向きに対して、捻じれが生じやすい。



剛床工法

剛床工法にすることにより、“面”で力を受け止めるので、捻じれに強くなる。



剛床工法を支える梁

剛床工法を支える梁は、1階壁上、2階壁下に、910mm間隔に配置されています。

さらに、梁の振れ止め防止のために1820×910(畳1畳分)の格子状に組み上げます。

このように造り上げた骨組みの上に構造用合板を直接留めることにより、水平剛性を高めています。



家全体を覆う屋根でも、水平剛性を確保

屋根瓦の下地板にも12mmの構造用合板を採用。屋根全体に構造用合板を敷き詰めることにより、風等によって引き起こされる屋根面の捻じれを抑える効果があります。また、剛床工法と組み合わせることにより、より強い水平剛性を確保することができます。

施工安全性の向上

ケントホームズは、構造面だけではなく、施工の安全性にも注目しました。従来の根太工法では、上棟時には床がなく、柱の上で作業することになり、足場が不安定で危険です。剛床工法では、上棟時に構造用合板を直接梁にとめ、足場を作ってから作業を行います。安全性と作業効率が上がります。